



東日本大震災を風化させない活動
推進センター 所長

中井 政義 さんに

被災地の実情と 震災の教訓を伝える



被災地で、震災の「語り部」として活動する、「東日本大震災を風化させない活動推進センター」所長の中井政義さん。

震災の1カ月後から、インターネット上のブログで被災地の情報を発信し続け、全国での講演や、被災地での語り部ガイドを通し、震災の齟齬を語り、その思いを強くした。

8月某日。取材で宮城県を訪れた際に、いまだ東日本大震災の爪痕が残る石巻の沿岸部を歩いた。復興途上の地域。津波にのまれて、さら地になった場所もあれば、家屋が新築されたところもある。1階部分が泥で埋もれた家や工場、門扉だけが残っている土地もあった。いずれも、震災被害の甚大さを物語っていた。震災は、まだ終わっていない——あらためて、その思いを強くした。

2011年3月11日、東北地方を激震が襲った。その後、大津波が襲来。1帯は、ことごとく波にのまれた。

「正直、もうダメだと思いました。自宅周辺は6級の津波が襲い壊滅状態。息子たちは音信不通。無事に逃げていてほしい——祈るような気持ちで、被災直後から、妻と一緒に心当たりを探し

て回りました」

震災から3日後、間一髪のところ津波から逃げていた家族と、無事に再会を果たした。しかし、自宅は2階半分まで津波で冠水。ライフラインも断絶しており、一家で避難所生活となった。

「家財道具を失い、家も失った。仕事の資料や顧客データも、保存していたパソコンごと流失しました。今までは生活や仕事が一瞬で全て無くなったんです。

生活を再建しようにも、何から手をつけばいいのか分からない。避難所で、途方に暮れました」

1カ月後、ようやく電気が復旧。当時、実家に身を寄せていた中井さんは、情報を得ようとテレビをつけたり、ところが、震災を過度にセンセーショナルに扱った番組ばかりで、本当に知りたい被災地の実情は、ほとんど伝えられていなかった。

「驚きました。被災地では、まだまだ苦しんでいる人がいるのに、メディアで伝えられているのは、一部の情報だけ。

震災の教訓や防災対策について講演する中井さん（本人提供）

その時、被災地で何が起きているのか、どんなことで苦しんでいるのか、震災を風化させないために、被災地の本音の声を発信しなければならぬと痛感したんです。そこで、ブログを使って、テレビなどでは報道されないような被災地の情報を発信し始めました」

時 対する憤りにもなった。しかし、ある時、中井さんは考えた。

「ただ不満を発信していても、現実には何が必要か、今の被災地の実情はどうなっているのか、正確な情報を前向きに伝えることで、復興支援につなげたい。そう考えたことが、語り部を始めたきっかけです」

以来、語り部として活動を行い、これまでに講演は全国43団体に、また語り部ガイドは130組以上に実施してきた。今では、家族連れも対象にして、被災地を巡る語り部ツアーなども行っている。

「ぜひ、実際に被災地を目で見て、震災の脅威について考えてほしいと思います。普段の当たり前前の生活が、どれだけありがたいことで、どれだけ大切なことであるか、気付けるはずですよ」



家族連れと被災地を回りながら、当時の様子を語る中井さん（本人提供）

避難生活から、生活の再建へ。被災地の復興」と一口に言っても、その段階は人それぞれだ。行政による、きめ細かな対応が急がれるが、被災者の人数も多く、また、被害も広域な分野に渡るため、それもままならない。

「震災から2年半が経ちます。しかし、本格的な復興は、まだまだ道半ばと言わざるを得ません。自力で復興できた方もいますが、行政の手助けがないと復興できない方々は、私を含め、まだ仮設住宅での避難生活を強いられているのが現

要なのです。被災した体験とともに、そうした実情を語り伝える人がいなければ、震災自体が風化してしまいます。まだまだ、復興に向けて歩んでいる人がいる。その声なき声を拾って届ける人が必要なのです。

語り部や講演では、私の話を聞いて、涙を流す方もいます。また、報道されていない真実を知り、がくぜんとする方もいます。そう感じていることは、被災者にとって大きな励みにもなります。故郷を奪われた被災者の悔しさを代弁する思いで、私はこれからも、震災の教訓を語っていきたく